チム旭

印刷を支え加工を活かす

Interview 39.

瓜破工場　工場長

加藤（かとう） 秀樹（ひでき）

2007年（平成19年）に旭紙工株式会社に中途入社した加藤秀樹さんは、現在、瓜破工場で工場長を務めています。さまざまな仕事を経験してきたからこそ感じる、旭紙工の魅力はどこにあるのでしょうか。仕事への思いや、かつての先輩とのエピソードなどから、加藤さんの人柄に迫ります。

――入社のきっかけを教えてください。

もともとは別の印刷会社の製本課で、派遣社員として働いていました。ところがあるとき、その会社の製本課がなくなることになり、機械と従業員数名とともに旭紙工に引き取られたのです。それがきっかけで入社し、縁あって正社員として働くようになりました。あのとき声をかけて雇ってもらえたことに、とても感謝しています。

――製本業務につく以前も、同様の仕事で経験を積まれていたのですか。

20歳くらいまではバンドでギターを担当していたため、その活動を終えてからは、楽器店でギター講師を務めていた時期もありました。エレキギターがメインでしたが、アコースティックギターを教えていたこともあります。

楽器の演奏以外で経験があるのは、運転の仕事など。アルバイトや派遣社員として、さまざまに場所を変えながら働いていた頃は、一つの職場で何年も仕事を続けた経験はほとんどなかったのですが、旭紙工では15年も働き続けています。こんなに長続きするとは思ってもみませんでした。

――なぜ旭紙工では長く働き続けられているのでしょうか。

周囲の人々に恵まれているためです。上司も部下も含めて、仲間がいるからがんばって仕事を続けてこられたと感じています。

旭紙工は、人間関係がとてもよい会社です。社長も常に、従業員を気遣ってくれています。社長を中心として一致団結している雰囲気が、この会社の魅力とも言える部分。従業員全員が同じ目標に向かって業務に取り組んでいます。

――これまでに辛かった仕事はありましたか。

数年前、業務中に事故を起こしてしまったときに、辛さを味わった経験があります。作業中のミスによる事故で、原因究明のためにお客様との面談が1か月ほど続きましたが、その間は生きた心地のしない日々でした。

原因は思い込みや確認不足によるものです。その後はこのときの失敗を教訓に、より慎重に作業を行うようにしています。

――逆によい思い出についても教えてください。

前の職場から一緒に旭紙工へ転職してきた先輩の言葉が心に残っています。先輩とはよく食事に行き、その都度ごちそうしてもらっていました。毎回申し訳なく思っていた私はある日、「今日は私にごちそうさせてください」と提案しました。しかし先輩は、その申し出を丁寧に制し、「俺に礼を返したいと思うなら、将来、お前の部下や後輩におごってやれ。それが俺に対する礼になるのだから」と言ってくれたのです。

この言葉があったからこそ、今まで仕事を続けてこられたのかもしません。今は部下もできました。先輩はすでに引退してしまい、なかなか会えなくなってしまいましたが、当時のお礼をしているつもりで日々、部下たちと接しています。

――今後の目標をお聞かせください。

工場長として社長から受ける指摘には、思い当たるところばかりで反省しきりの毎日ですが、自らの役割に徹し、メンバーが少しでも働きやすい職場づくりを目指していこうと励んでいます。もうすぐ繁忙期がやってくるので、業務の効率化にも取り組むつもりです。

機械の扱い方やメンテナンスなど、やるべきことを確実に行い、生産性を上げて、よりよい結果を残せるよう、日々取り組んでいきます。

上司や同僚、部下たちへの思いを胸に、長年にわたって業務に励んできた加藤さん。工場長として、これからも旭紙工の発展に貢献していくでしょう。

企業情報

◆創 立 年：1983年1月
　※創業：1963年
◆年　　商：15億円
◆従業員数：200人

※ 2018年12月実績

設備紹介
―金具付け機―

カレンダー製本には欠かせない「金具付け機」。導入から20年以上もの歴史ある機械ならではの使用するコツや、思い入れを課長を務める松尾さんにお伺いしました！

私が紹介します！

まつお　たけし
松尾 剛志さん
工場本部 本社 マルチ部門
課長

カレンダーを金具でとめる専門の機械

Q.どのような機械なのでしょうか？

カレンダー製本に使用する機械です。カレンダー製本は主に、タンザックという厚紙で束ねる製法と、金具でとめる製法の2種類があります。そのうち金具でとめる製法を行うのが、金具付け機です。カレンダーの表紙と12か月分の紙を順番に重ねていく丁合いという作業の後、一冊ずつ機械にセットして金具付けを行います。当社では金具付けのみ行う機械を1台、丁合いと金具付けを一貫して行う機械を2台所有しています。

導入から数十年。今も現役バリバリ！

Q.いつ導入されたものですか？

3台とも私が入社したときからあるので、20年以上は経過していると思います。調べてもわからなかったので、導入されたのは相当昔です。オーバーホールや部品の交換こそありますが、今も元気に動いてくれています。

1日最大2万冊を製造

Q.性能や使い方を詳しく教えていただけますか？

10CM四方のものからA1サイズまで、幅広いサイズに対応しています。製本にかかる時間は約1秒。小さな製品なら1時間あたり約2000冊、1日あたり約1万5000冊～2万冊が生産可能です。1台の機械に2名が担当にあたり、機械に投入する人、製品を検査する人に分かれます。特に検査は品質管理を左右する重要な役割です。傷の有無、左右のバランス、金具の位置など確認する項目が多数あります。金具が飛び出していれば木槌で叩いて位置を正す調整も行います。

金具ならではの怪我に注意

Q.機械を使用する上での注意点はどこでしょうか？

アナログ的な視点になりますが、いかに検査で不具合に気づけるかどうかです。金具で傷が入りやすい箇所を事前に把握しておかないと、全ての製品に傷がついていたということもあり得ます。また、金具で手や指を怪我してしまう可能性があるので、作業中は手袋をはめて怪我の防止に努めています。さらに機械が壊れないよう、稼働前に毎回油をさすことも欠かせません。

人の手による微調整がカギ

Q.使用するために資格や免許は必要でしょうか？

資格は必要ありません。ただ、経験に裏打ちされた技術は必須です。使用方法はさほど難しくありませんが、昔の機械ならではの奥深さがあります。まず経験を積まないと素早くセットができません。また、最小・最大サイズの製品は排出されにくく、微調整が難しい。3か月ほどで一通りの操作は覚えられますが、品質やスピードを保ちながら作業するためにはさらに経験を積む必要があります。

教育面が課題

Q.現在この機械を使用できる方は何名いますか？

セッテイングから全て操作できるのは、私を含め5名です。使用できる人数を増やしたいのですが、カレンダー製造のシーズンは3か月しかなく、毎年生産に追われてなかなか教育に手が回りません。加えて金具付けの製本は危険が伴うこともあり、年々生産数が減少しています。教育したい社員は1名いますが、教える機会自体が減っているのが現状です。

長く使い続けるための取り組みを開始

Q.今後の目標は何ですか？

自分たちで使う機械は自分たちで綺麗にしたいと思い、昨年から技術開発部に頼らず、自分たちでオーバーホールできるよう取り組みを始めました。中の構造まで理解した上で使用した方が悪い箇所を早く見つけ、機械に負担をかけずに調整できます。古い機械ですが売り上げを出すために必要不可欠な存在なので、これからも大事に使いたいと思います。